

聖書：使徒 20：13～27

説教題：神の恵みの福音をあかしする

日時：2014年6月22日

パウロの第2次世界伝道旅行も終わりに近づいています。19章21節に「パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。」とありましたが、そのマケドニアとアカヤへの訪問を終えたパウロは、いよいよエルサレムへの旅に出発します。前回は小アジアのトロアスまで戻って来ましたが、さらに今日の箇所では小アジアの西岸を南下します。

13節を見るとパウロは後から一人で出発したようです。なぜ彼は遅れて出発したのか、またパウロは陸路を取るつもりだったと記されていますが、その目的は何だったのか、理由は書かれていません。注解者たちは、前回3階から落ちたユテコの回復を見届けてから出発しようとしたので遅れたのではないかと言います。また陸路を歩いて行くことに決めていたのは、一人になって静かに神と交わり、祈るためだったのではないかと言います。

その後、パウロと他の同行者たちはアソスで落ち合い、舟に乗ってミテレネに、翌日キヨスの沖に、次の日にサモスに、さらにその翌日にミレトへと進みます。ミレトはエペソを通り過ぎて南へ下った町です。パウロは今回はエペソに立ち寄らないことに決めていました。この町に短く滞在してまた離れることは難しいという判断がパウロにはあったのでしょうか。そこで代わりにエペソの長老たちに来てもらうことにしました。その彼らにパウロは告別説教をします。25節にあるように、彼らとはもう二度と会うことがないだろうと予測してです。そこで教会を治める立場にある彼らに残しておきたい大切なメッセージを語ったのがこの部分です。今日はそのパウロの説教の前半部分を見て行きます。

まず彼が語っているのは、これまでの自分の働きについてです。18節：「皆さんは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。」そしてパウロが注目させている姿は、19節の「私は、・・・主に仕えました。」という姿です。パウロの生き様はこの一言に集約することができました。彼は自分の野望や自己実現のためではなく、主のしもべとして仕えました。どんな仕方で仕えたのか、19節に三つのことが書いてあります。

一つは「謙遜の限りを尽くし」。これは自分を主張しないということです。相手の救いのためには喜んで低い立場を取るということです。1コリント9章でパウロは「私はすべてのことを福音のためにしています」と言っています。そのためには自分の権利の一つも用いなかった。ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のようになったと。主に仕える人にはこういう謙遜が要求されるということです。

二つ目は「涙をもって」。ローマ9章2節：「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。」Ⅱコリント2章4節：「私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。」ピリピ3章18節：「私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、・・・云々」主に仕える歩みにおいては人に裏切られたり、傷つけられたり、嫌な思いをさせられたり、がっかりしたり、心配したり、あるいはホッとしたり、

喜んだり、感謝したり、…まさに心を注ぎ出し、涙を注ぎ出しての多くの労苦が伴うということです。

そして三つ目は、試練、特にユダヤ人の陰謀による試みの中で仕えたということです。パウロの宣教には迫害がつきものでした。むちで打たれたり、牢に入れられたり、石打ちにされたり、……。エペソでも最初はユダヤ人に歓迎されましたが、3カ月を過ぎてから迫害されました。

このように、主に仕える歩みには色々なことが伴います。それは決してカッコいいことではありません。私たちは主に仕えるという時、これら「謙遜の歩み」「涙を流す歩み」「迫害される歩み」を覚悟しているでしょうか。また、実際にこれらのしるしは私たちの奉仕の生活に見られるでしょうか。

また、パウロはここであらゆる方法で、あらゆる人々に、あらゆるメッセージを、あらゆる力をもって語り伝えたことを述べています。パウロは人々の前でも家々でも教えました。またユダヤ人にもギリシヤ人にも宣教しました。また神のご計画の全体を余すところなく知らせました。そして彼は益になることは少しもためらわずに語りました。これらの言葉を見る時に、パウロがいかにひた向きに福音のために仕えたかが分かります。そして驚くことは、このように自分が歩んで来たことをあなたがたはよくご存知です、と最初に言い切っていることです。この話を聞いた長老たちが首を傾げたり、異論を唱えたりはしていません。もちろんパウロは自分を誇っているのではないのです。パウロにしてみれば、このように仕えることができたのはただ神の恵みによることです。ですからこれは神への賛美と言えます。と同時に、このような自分の姿が人々の励ましになるようにとの意図もパウロは持っていました。彼は様々な箇所ですべて「私を見ならう者になってください。」と言っています。ピリピ3章17節、Iコリント4章10節、11章1節。しかし同時に「私がキリストを見ならっているように」とも付け加えています。私たちはよく、「私を見ないで、キリストを見てください」と言いやすいのですが、パウロはそうではありませんでした。キリストを見るのはもちろんですが、キリストを見ならっている自分の姿を通して、それが人々の励ましになるようにと願いつつ歩んだパウロでした。指導者たちはこのような者でなければならないということでしょう。

さてパウロは22節から、これからの歩みについて語っています。22節：「いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。」パウロがエルサレムへ行こうとしていることは、すでに19章21節に示されていました。しかしここにある「心を縛られて」とはどういう意味でしょうか。欄外を見ると別訳で「御霊に縛られて」とあります。19章21節でもパウロは「御霊の示しによって」マケドニアとアカヤを通ってからエルサレムに行くことにした、とありました。その御霊の働きが、ここではもう少し強い表現で語られていると言えます。すなわち御霊がパウロをいわば縛るようにして導いている。強制力をもって、強く促している。一体その行き先には何があるのか、パウロははっきり分かりませんでした。分かっていることもありました。それは23節にあるように「なわめと苦しみが私を待っている」ということでした。確かにエルサレムはパウロにとって安全な所とは言えないでしょう。前にエルサレムに行った時もパウロは殺されそうになりました。今や世界各地のユダヤ人から迫害されているパウロのこと、エルサレムに乗り込むことは、ま

さに飛んで火に入る夏の虫になるでしょう。しかし聖霊はそのエルサレムへ行くようにとパウロを駆り立てています。なぜかと言えば、それが主の御心だからでしょう。このような御霊の促しのもとで、私たちならどちらの道を行くのでしょうか。御霊の促しを退けて身の安全を第一に確保し、自らの命を保つ生き方を選ぶのでしょうか。それともたとえその先に苦しみがあっても、御霊が行きなさいと言われる道に進んで主に従う歩みを全うするのでしょうか。パウロは自分は聖霊に従う道を行くと言っています。そして24節でこう証しします。「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

聖書が述べていることは、神は私たち一人一人にも私の走るべき行程を備えておられるということです。私の人生は主に救われた後、後は好きなように生きて良い人生ではない。主は後は自由にしなさい、と私たちに任せているのではない。ですから大事なことは、神が定めてくださった走るべき行程を見出して、そのコースを走り尽くす歩みをするのか、それともただ自分が走りたい道を行くのかということです。パウロは目先のことでしか判断できない愚かな自分の道ではなく、神が備えてくださっている自分のコースを最後まで走り尽くすことこそ、私にとっての生き甲斐であり、また喜びであると告白しています。彼をこのように駆り立てたものは何でしょうか。それは24節の真ん中の「主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす」という任務を果たし終えることができるなら」という部分に見ることができます。

パウロはここで福音のことを「神の恵みの福音」と言っています。ただの福音ではなく、「神の恵みの福音」なのです。この神の恵みにパウロ自身、深く生かされて来ました。本来彼は罪ゆえに神にさばかれ、永遠の滅びに投げ入れられて当然の者でした。しかしそんな者を救うために、神はイエス・キリストを地上に送り、その方を十字架につけてくださいました。そしてその方の測り知れない犠牲と引き換えにして、罪赦され、神の前に義と認められ、永遠の命に生きる者とさせられました。この神の恵みを知り、この恵みに生かされている彼としては、もはや地上に残された人生は自分が主である人生ではない。それはただただ神に感謝をおささげする人生であり、神の恵みの福音をあかすこと以上の素晴らしい人生は考えられなかったのです。この神に応答せず、ただ自分の命の安全や祝福や平和を守って、やがて自分のために死ぬだけの人生ほど空しいものはなかったのです。ですからこの先、何があるとしても、神が私に定めてくださった行程を走り尽くし、神の恵みの福音をあかす任務を全うできるなら、それこそ私の本望であると述べたのです。

このパウロの言葉に照らして私たちの生き方はどうでしょうか。神は私たち一人一人にも走るべき行程を備えてくださっています。神は私の人生に計画を持ってくださっています。またただそれを持っているだけでなく、聖霊を遣わして私たちの心をも縛ってくださいます。聖霊は私たちにキリストの素晴らしさを示し、キリストの愛で私たちの心を締め付けて、キリストに従う道を行くように働きかけます。それは生まれながらの人間の考えとは違うものです。普通の人には苦しいことは避け、面倒な道は選ばず、むしろ楽な道、安全な道、楽しい道、快適な道を選ぶでしょう。しかしそのような歩みによっては神の国は拡がりません。イエス様は言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を追い、そしてわたしについて来なさい。」またパウロも言いました。「私たちが神の国に入るには、多

くの苦しみを経なければならない。」御霊はこの主のみこころに沿って私たちの行くべき道を示します。色々な場面で、キリストとともに十字架を負う生活へと進むようにと私たちを導きます。その御霊の促し・縛りに対して私たちはどう歩む者でしょうか。世の人は言います。一度しかない人生。だから私は自分の心に正直に、自分がやりたいことをどこまでも追い求めて歩んで行こう。しかし神の恵みを知った人は言います。一度しかない人生。だからこの人生を、神の恵みに心から感謝して、神が定めてくださっている通りに、神の恵みの福音をあかしする人生としてささげて行こう。神が備えてくださっている走るべき行程は人によってそれぞれ違います。皆がパウロと同じ直接伝道の働きにつくわけではありません。しかしどのような行程を走るのであれ、その根底にあるものは同じでしょう。それは私のあらゆる歩みを通して神の恵みの福音をあかしするということです。それが私の目標であり、また真に価値ある人生であるということです。私たちは自分が考えた自分が行きたい道に行くのか。それとも御霊に縛られ、御霊が示してくださっている主に従う道、神の恵みに応答する道に行くのか。私たちも自分の走るべき行程を走り尽くすという真の価値あるすがすがしい歩みへ進みたいと思います。そしてこの身を通して神の恵みの福音をあかしするという任務を果たし終えることへ向かう最も充実した人生、意義ある人生へ進みたいと思います。